

動のアイデアと魂

——『ソピステス』 245e-257a ——

久保 徹

「しかし、なによりアイデアが感覚的事物のうちの永遠なるものや生成消滅するものに対していったい何をもたらしうるのかを人は問うであろう。なぜなら、アイデアはそれらにとっていかなる動や変化の原因でもないからである」
(*Metaph. A 9. 991a8-11*)

「また、アイデアは範型であり他の事物はアイデアを分有すると語るのは、空疎なことを語ることであり詩的な比喩を語ることである。というのは、アイデアに目を向けて事物にはたらきかけているものは何であるのか？」(*ibid. 991a20-23*)

「また『パイドン』では、アイデアは事物があることの原因でも生成することの原因でもあると語られている。とはいえ、たとえアイデアがあろうと、それでも動かすもの(始動因)がなければ、それを分有するものは生じない ……」(*ibid. 991b3-5*)¹

アリストテレスの提起するこれら一連の問題に対して、プラトンにおいては魂や知性こそがまさにそれに当たるとひとまず答えることは、むしろ容易であろう²。

けれども、その魂の存在のあり方についてさらに問うとすればどうだろうか。

魂はアイデアと並ぶ実在なのか、それともいかなる存在身分なのか、またそのような存在としてはたしてそこで求められているような原因たりうるのかをあらためて問われるならば、われわれはおそらく答に窮するのではなかろうか。あるいは、動のアイデアなるものを認めるとすれば、もろもろの生成や動の原因を魂に帰するにあたって、同じくある意味での動の原因としての動のアイデアと魂との関係をどのようにとらえるべきであろうか、そしてそれは魂の、動の原因としての資格を損なうことにはならないだろうか。そもそもプラトンのアイデア論的図式による世界理解のな

かで、魂はいかなる位置を占めると考えるべきなのか。——これが本稿における私の最も基本的な問題意識である。

プラトン後期イデア論の展開において、魂論との統合に向けて、イデアと魂という二つの原理によって織りなされる世界観が目指される。しかし同時にそこには、以上のようないくつかの問題が伏在するように思われる。本稿では、『ソピステス』におけるいわゆるギガントマキアーの議論（245e-249d）およびメギスタ・ゲネーの結合関係をめぐる議論（249d-257a）の検討を通じて、動のイデアの逆説性と魂の存在論的身分について考察し、これらの問題について考えるための手がかりとしたい。

I τὸ παντελὺς ὄν をめぐる諸解釈の検討 —— ギガントマキアーの論旨

まずは手始めに τὸ παντελὺς ὄν（248e7-249a1）をめぐる諸解釈の検討から始めたい。それぞれの論者のギガントマキアーの議論の全体的な理解が、その解釈に集約されていると思われるからである。問題の一節は次のようなものである。

エレアの客人「しかし、ゼウスに誓って（πρὸς Διός）、はたしてどうだろう？ いたいわれわれは、ほんとうに動や生や魂や思慮が、全き意味での実在にそなわっていない（τῷ παντελὺς ὄντι μὴ παρεῖναι）というようなことを、そう簡単に信じてよいものだろうか——それが生きてもおらず、思慮をはたらかせることもなく、厳かな聖像さながらに（σεμνὸν καὶ ἅγιον）、知性をもたずに不動のまま立っている、などということをも？」

テアイテトス「それはたしかに、お客人、われわれは恐ろしい（δεινός）説を容認することになるでしょうね」（248e6-249a3）³

従来の解釈の立場は、概ね次の三つに分類できよう。

- (1) イデア（の総体）が生命や魂や動をもつことを認める⁴
- (2) イデア以外に魂や動を実在として認める⁵
- (3) 生成一般を実在と認める⁶

それぞれの問題点を順に論じる。

(1) イデア（の総体）が生命や魂や動をもつことが認められているとの解釈について。

個々のイデアに魂や動を認めると解するのは論外としても⁷、この解釈の立場に立つ者は、諸イデアの総体としての、いわばイデア界が全体として生命や魂をもち、知的ないし精神的な活動を行なっているという趣旨の記述であると理解している。有り体に言えば、神の自己思惟において、イデアの総体は思惟対象であると同時に思惟主体であるという事態が成立し、このときイデア界の全体は知性と魂をそなえた生きものとなるというのである⁸。

しかしながら、この文脈において、仮にここでイデアが問われているのであるとすれば——たとえ後に見るように、主語が「われわれ」に切り替わっているにせよ——、形相主義者にとって到底受け入れ難いはずの——諸イデアの総体であるにしても——ともかくイデアがなんらかの意味において動くとの想定が公然と主張されているということは、議論の流れのなかであまりに唐突にすぎ、いかにも奇異に映る。

つまるところ、この解釈は、アリストテレスの不動の第一動者をめぐる考察⁹に媒介された、プロティノス以来の新プラトン派の独自の思想を、プラトンにもち込んだ解釈と言わざるをえない。だが、少なくともプラトン自身にそのような思想傾向があったことを証拠立てるテキスト上の根拠は見当たらない。

(2) イデア以外に魂や動が実在として認められているとする解釈について。

この解釈に立つ論者らは、τὸ παντελὺς ὄν を「実在の総体」と解し、そのうちに魂や動が含まれると理解する。

この解釈の問題点として、τὸ παντελὺς ὄν を「実在の総体」と解することが、"παντελὺς"の通常の語法から懸け離れているということが、まず指摘されねばならない¹⁰。

また、仮に「実在の総体」と解する点を譲歩するとしても、はたしてこの一文は、魂や動がそれらの一部として含まれるという意味に読めるだろうか。"πάρειμι" は、あるものにそなわる、そのもとにある、というのが本来の意味であり、したがって

「実在の総体」が全体として魂や動をもつという意味でなければならないだろう。文章の後半で、それ（αὐτό）が生きて思慮し、知性をもち動くと主張されていることが、このことを裏書きする。

内容的に最も重大と思われるのは、生成／実在の対立図式¹¹を断りもなく放棄することになる点である。魂や動をただちに生成と見なすべきか否かはともかく、それらを実在に繰り入れるとすれば、恒常不変に同一性を保つという実在の本質規定を明らかに損なうことになろう。しかるに、生成／実在の対立図式は、さらに実在＝静止という定式は、このあとの議論においても依然としてなお効力を保持し続けるのである。また、形相主義者にとって受け入れがたい想定であるという点で、先の(1)の場合と同様、議論の文脈にそぐわぬ不自然な読み方と言わねばならない。

(3) (魂や動のみならず) 生成一般が実在として認められているとの解釈について。

この解釈に対しても、(2)について指摘された点がすべて当てはまる。すなわち、まず、「実在の総体」に生成一般が含まれると解することによって、“παντελώς”の通常の語法を逸脱していること。“πᾶρειμι”の意味の変則的な理解。また、ほかならぬ生成そのものを実在として認めることによって、生成／実在の対立図式を真っ向から否定することになる。しかし、多くの論者が指摘するように、生成／実在の対立図式は、『ソピステス』のみならず、『ティマイオス』や『ピレボス』などそれ以降の対話篇においても堅持されているのである¹²。

この解釈にとってひとつの典拠となるのは、一連の議論の帰結として述べられる249dの次の記述である。

エレアの客人「… あるものと万有（τὸ ὄν τε καὶ τὸ πᾶν）は、動かぬもののすべてと動いているもののすべて（ὅσα ἀκίνητα καὶ κεκινημένα）との、その「両方とも」であると言わなければならない」（249d3-4）

つまり、この解釈をとる論者らは、248e-249aをこの箇所の記述とまったく同じ意味に解して、「動いているもののすべて」すなわち「生成一般」が実在の一半と見なされていると理解しようとするのである¹³。だが、実際の議論の推移は、248e-249aとこの249dとでは——後に見るように——すでに別のステップに進んでいることが

明らかであり、二つの記述をそのまま同趣旨に解することは許されない。

この解釈の意図は、宇宙万有が生きて動いているという、『ティマイオス』や『法律』第十巻に見られる思想をそこに読み取ろうとすることにある。だがそれは、少なくとも『ソピステス』のこの文脈においては、あまりに性急で、作為的にすぎる感を否めない。

かくて、以上のいずれの解釈にも承服することはできない。

では、τὸ παντελῶς ὄν をどのように解すべきだろうか。再びテキストにかえろう。

形相主義者との対話が不首尾に終わったのを受けて、エレアの客人はテアイテトスに向かって呼びかける。

「しかし、ゼウスに誓って、はたしてどうだろう？ いったいわれわれは、ほんとうに動や生や魂や思慮が、全き意味での実在にそなわっていないというようなことを、そう簡単に信じてよいものだろうか？ …」

"Τί δὲ πρὸς Διός;" ではじまるこの問いは、直前の議論とは独立・不連続に、まったく別個にあらたな論点を開こうとする性格のものである。そこで問われているのは、「全き意味での実在」にさえ、動や魂などがそなわっていないと認めるべきかということであり、「ほんとうに」(ὡς ἀληθῶς) という文頭の一句がこの疑問をほとんど反語に近づけるほどに強めている。そこから見て取れるのは、エレアの客人の問いは「全き意味での実在」に最大限の力点をおいているということである。つまり、その独自のあり方に議論の突破口を見出そうとしているのだ¹⁴。それがおそらくは「神」を意味するものであろうことは、あらたまった注意を喚起する「ゼウスに誓って」という間投句、直後に付け加えられる「厳かな聖像さながらに」という形容、これに対するテアイテトスの「恐ろしい説」¹⁵という応答などに示唆されている¹⁶。ほかならぬ「神」に動や生や魂や思慮、さらには知性がそなわっていないと考えることはできないという必然が、議論の停滞を破る転換点となるのである¹⁷。これが文脈に即した、最も無理のない読み方であろうと思われる。

その後の議論の流れを追っておこう。テアイテトスの同意を受けて、エレアの客人は、「全き意味での実在」が知性をもち、生命と魂をもつことから、それが動くこ

ともまた必然であると論じ、先ほどの同意事項を確認する (249a4-b1)。

そして、次のように推論する。

「したがって、動くものも動も、あるものとして認めなければならない (Καὶ τὸ κινούμενον δὴ καὶ κίνησιν συγχωρητέον ὡς ὄντα)」 (249b2-3)

さらに付け加えて、すべてが不動であれば、知性がどこにも存在しないことになり、またすべてが動いていても、やはり知性が存在しないことになることから (249bc)、

「あるものと万有 (τὸ ὄν τε καὶ τὸ πᾶν) は、動かぬもののすべてと動いているもののすべてとの、その「両方とも」であると言わなければならない」 (249d3-4)

という結論が導かれる。

さてここで、全き実在としての神に知性や生命や魂や動がそなわっているからといって、ただちに知性や生命や魂や動が一般に実在であるとは限らないことは自明であろう。もっとも、神の生命や魂であれば、それが神の本質である限りは、実在と呼べるかもしれない。けれども、あらゆる生命や魂、まして動一般が実在であるとは必ずしも言えない。それらについては、せいぜい存在すると言いうるのみであろう。上の引用で、たんに「あるもの (ὄντα) として」と推論されているのは、まさしくその意味であろう。ちょうど、物体主義者たちに、身体に次いで魂が存在すると認められ、魂にそなわることによって、正義などの徳もまた存在すると認められたように (246e-247a)、いまもまた、実在としての神にそなわることによって、生命や魂、さらには動一般が、かろうじて存在するものとして認められるにいたるのである。このような議論の進展によって、存在とは動くものと静止しているものの両方であるという帰結が導かれている。「あるものと万有 (τὸ ὄν τε καὶ τὸ πᾶν)」と並置されていることに示唆されるように、ここでの "τὸ ὄν" はたんに存在という意味であろう¹⁸。また「万有」と換言されるべき「あるもの」には、すでに知性や生命や魂の動のみならず、広く生成一般としての動が含まれることも当然含意されていよう¹⁹。

われわれの解釈の立場をまとめると次のようになる。

(4) 全き実在としての神に魂や動がそなわっているべきことによって、魂や動ひいては生成一般の存在が認められる

この解釈にとって残される問題は、ギガントマキアーの議論全体の趣旨がこの立場からどのようにとらえられうるかである。ギガントマキアーの議論が大筋で目指していたものは何だったのか。

物体主義者と形相主義者の間で戦わされている実在をめぐる論争を「神々と巨人族との戦い（ギガントマキアー）」になぞらえて、エレアの客人はその渦中に割って入る。彼の狙いは、そのいずれか一方に加担して他方を挟撃することではなく、双方から譲歩を引き出しつつ、「あるもの」についての考察をテアイテトスとともに深めることである。手でつかめるものだけがあり、実在とは物体にほかならないと強硬に主張する物体主義者と、真の実在は思惟によってのみとらえうる非物体的な形相であり、物体は動きつつある生成にすぎないと説く形相主義者から、それぞれ順に説明を求めてゆくことにして、彼らはまず、頑強な物体主義者を敬遠し、より善良になった物体主義者に向かう（245e-246e）。

善良になった物体主義者からエレアの客人は、生きものや魂、また正義、思慮その他の徳と悪徳のあることの同意を次々に取り付ける。そのうちには、物体も物体でないものも含まれている。物体主義者にとって存在の概念はすでに拡張されている（246e-247c）。

それでは、その両方をともに「ある」と言うとき、彼らはどのような共通の「ある」の規定に立っているのか。エレアの客人は、「はたらきかけたり、はたらきかけられる力をもっているものはすべてほんとうにある（ὄντως εἶναι）」、すなわち「存在（τὰ ὄντα）とは力（δύναμις）にほかならない」という規定を提案し、受け入れられる。物体主義者にとっての存在の概念の拡張が「存在のデュナミス規定」によって根拠づけられるのである（247c-248a）。

これに対して形相主義者はより穏やかな人たちとはいえ、彼らの生成／実在の対立図式は思いのほか強固である。彼らは生成と実在とを峻別して、われわれは身体によって感覚を通じて生成と関わりをもち、魂によって思考を通じて真の実在と関

わりをもつと語り、実在はつねに恒常不変のあり方を保つ (ἀεὶ κατὰ ταὐτὰ ὡσαύτως ἔχειν) が、生成は刻々に変転してやまないと主張する (248ab)。

エレアの客人は、すかさず「関わりをもつ」ということを「はたらきかけたり、はたらきかけられる」ことととらえて、生成と実在とにともに「存在のデユナミス規定」を適用しようとするが、形相主義者は容易に承服しない。生成ははたらきかけたり、はたらきかけられるが、実在にはどちらも妥当しないと彼らは言う。なぜなら、魂が知り、実在が知られるということが、はたらきかけ、はたらきかけられることであるとするならば、実在は知られるに依じて、「はたらきかけられる」ことによって変動を被る (κινεῖσθαι) ことになるはずだが、しかるに、静止しているものにそれは起こりえないことであるからだ (248b-e)。

この挫折は何を意味するのだろうか。エレアの客人が形相主義者に対して図ったのは、物体主義者によって受け入れられた「存在のデユナミス規定」を生成と実在に適用しうることを認めさせ、物体主義者が物体と非物体をともに存在すると同意したように、実在 (形相) のみならず「生成もまたある」との譲歩を彼らから引き出すことであった。すなわち、生成も実在もともに「存在」であるということこそ、これまでの議論がつねに一貫して目指してきた方向だった。生成も「実在」であるということ、ではない。

ところが、エレアの客人は形相主義者から手強い抵抗にあう。実在 (形相) の恒常不変性・不動性を守るために、「存在のデユナミス規定」を彼らは受け入れようとしないのである。形相主義者にとって、実在＝静止という図式はそれほど強固なものであったのだ。

そこでエレアの客人は、形相主義者に対してはこの規定の適用をひとまず断念する²⁰。そして、それまでの議論の方針を転換し、形相主義者に向けて語りかけていた姿勢を転じて、テアイテトスに向き直り、「われわれ」の判断を問う――。

それが、問題の τὸ παντελῶς ὄν をめぐる 248e-249a の場面である。

むろん「われわれ」は形相主義者を代弁すべく要請された立場の延長ではあるにせよ、また「われわれ」自身がもとより形相主義者の立場に近い者であるにせよ、「われわれ」は――ここではおそらく「多くの形相を説く人々」とは一応区別された「哲学者」としての立場で (249c10-d1) ——「全き実在」についての自らの思念にもとづいて、魂や動、そして生成のあること (存在) を認めるにいたるのであ

る²¹。物体主義者に屈服して、生成が実在であると認められたわけでも、形相主義者を捨ておいて、魂や動が実在であることが論証されたわけでもない。なお、「存在のデュナミス規定」を受け入れない形相主義者に対しては、それゆえまたその限りにおいて「われわれ」にとっても、魂や動や生成を存在として認めさせる議論さえ、まだ宙に浮いたまま完結していない。

II メギスタ・ゲネーの結合関係 —— 256b の解釈について

「動くものも静止しているものもともにある(存在する)」というギガントマキアーの議論の一応の結論を受けて、エレアの客人の考察は、動のアイデアを含むメギスタ・ゲネーの結合関係の検討へと移行してゆく。その過程で、動のアイデアに関してテキストの解釈の分かれるある本質的な問題が浮かび上がるのだが、その問題について論じるまえに、まずはメギスタ・ゲネーの結合関係をめぐる議論のあらましを簡単に見ておこう。

メギスタ・ゲネーの結合関係をめぐる議論

動も静止も「あるもの」(有)であるにもかかわらず、有はそれ自身の本性においては動でも静止でもない別のものである。動と静止は正反対のものであり、動いても静止してもいないものはありえないために、そのことは一見不可能にも見える。「あるもの」について気づかれたこの困難を乗り越えることが「あらぬもの」の解明に役立ちうる可能性を仄めかしてテアイテトスを励ましつつ、エレアの客人は、「晩学の徒」らの誤りに陥らぬよう警告を挟みながら、有とは別のものであるにもかかわらず、動と静止がいずれもあると言いうるための、有と動と静止の結合関係の可能性の考察に向かう(249d-251c)。

想定されうる可能性は、

- (i) それらはけっして互いに結合しない
- (ii) すべてが互いに結合する
- (iii) あるものは互いに結合するが、あるものは結合しない

の三つの場合のいずれかだが、それぞれを順次検討し、

(i) は、動も静止も有を分有せず、あらぬことになる

(ii) は、動が静止し、静止が動くことになる

という理由で退けられ、消去法により (iii) が残される (251c-252e)。

そして、このような結合関係を明らかにする知識は、ディアレクティケーの知識にほかならないことが指摘され、イデアの相互関係の全体像を示しつつ (253d)、それらの関係を識別しうる能力こそ、哲学者のもつべき能力であると述べられる (252e-254b)。

われわれはここではじめて明確に、イデアの相互関係をめぐる考察のなかに入り込んでしまっていることに気づかされる。こうして動のイデアは、静止や有のイデアとともに、静かにさりげなく導入されるのである。その際、動もまたあること、そして静止=実在、ないし静止=ある(有)という図式の解体 (250a-c) が、実在としての動のイデアの確立を促していることは注意されてよい。それに対して、動と静止の対立関係がその後の議論のなかで次第に際立ってゆく。

次いで、エレアの客人は、最も重要なイデア(メギスタ・ゲネー)のうちのいくつかを取り上げて、それらの間の結合関係を検討することを提案する。その目的は「あらぬものがある」と言いうることを示すことにある (254bc)。

まず、これまでの有・動・静止に加えて、それらとは別のものとして同と異が選定される。その際にも、動と静止が互いに混合しないことが、個々のメギスタ・ゲネーの独立性を示すための論拠として再三用いられていることが目をひく (254d-255e)。

さて、有・動・静止・同・異の五つのメギスタ・ゲネーの結合関係の検討は、動のイデアを中心に以下のように進められる――

① 動は、静止とは異なり、静止ではあらぬ。だが、有を分有することによって、ある。

② 動は、(異を分有することによって) 同とは異なり、同ではあらぬ。だが、同を分有することによって、(それ自身と) 同じものである。

③ 動は、同や静止と異なるように、異とは異なり、異であらぬとともに、異なるものである。

④ 動は、有とは異なり、有であらぬとともに、有の分有によって、あるものである。

(255e-256d)

それゆえ「あらぬものがある」(異の分有によって、あらぬ(異なる)ものが、有の分有によって、ある)ということが、動のみならず、すべてのアイデアに関して可能である、と一般化され、さらに、有それ自身もまた、他と異なることによって、あらぬ、すなわち「あるものがあらぬ」(あるもの(有)が、異の分有によって、あらぬ)という帰結が導かれる(256d-257a)²²。

256b の解釈について —— 動のアイデアの逆説性

その検討の過程で、動と静止の対立関係をめぐって、テキストの解釈の分かれる一つの問題が生じる。問題となるのは、②の「動が、同じものであるとともに、同じものであらぬ」という一見矛盾するように見える述定に対して、「動が、(同との関係において)異を分有するゆえに、同であらぬとともに、それ自身との関係において、同を分有するゆえに、同じものである」という説明が加えられる直後に続く、256bの次の記述である。

エレアの客人「すると、もしかりに〈動〉そのものが何らかの仕方で〈静止〉を分取するとしたら、それを静止しているものと呼ぶことも何ら奇妙なことではなかったのではなかろうか？(Οὐκοῦν κἂν εἴ πη μετελάμβανεν αὐτὴ κίνησις στάσεως, οὐδὲν ἂν ἄτοπον ᾗν στάσιμον αὐτὴν προσαγορεύειν;)」

テアイテトス「ええ、それはまったく正しいことです(Ὁρθότατά γε)、いやしくも類のうちのあるものは互いに混じり合おうとし、あるものは混じり合おうとしないということを、われわれが承認すべきだとするならば」(256b6-9)

論者たちを一様に困惑させるのは、ここでの「動が静止を分有する」という可能性への留保が、動と静止の対立関係についてのこれまでの叙述と相容れないように

思われる点である²³。まして、それを即座に容認するようなテアイテトスの返答は、ほとんど場違いにさえ見える。そこで、二人のやりとりの間にテキストの欠損を予想して、これを補訂する試みがなされてもいる²⁴。しかし、それはあくまで他の解釈の可能性がすべて尽きた場合の、窮余の策でしかないだろう。

エレアの客人の問いが、未完了過去による非現実の条件文で述べられており、したがって、仮定された事態の否定が含意されていることによって、分有の可能性は退けられていると理解することは可能だろうか²⁵。テアイテトスの答は、その否定の含意に対する同意なのだ、と。しかしながら、その場合にもなお「これまでわれわれの議論において認められた範囲では」という限定のもとで語られていると解する余地があるのではなかろうか。たんに非現実の仮定法で語られているというだけでは、必ずしも一概に可能性の否定と断ずることはできない²⁶。

たしかに、テアイテトスの応答では、混じり合う場合と混じり合わない場合が言及されており、直前の箇所ですべられた動と同や異との関係が前者に相当するのであれば、動と静止の関係は後者の場合に当たるものとも考えられよう。だが、後者は、一般にありうる場合のひとつとして触れられているか、あるいはむしろ、その両者を包括して、動と静止の関係について、一般的な可能性があらためて確認されているにすぎないかもしれない。つまり、動と静止の関係についても、いずれかの場合が成り立ちうるはずだ、と。それがおそらく最も自然な読み方であるように思われる。

だがそれでは、動のアイデアが静止を分有することによって、なんらかの意味で静止することは、はたしてありうるのだろうか²⁷。

動のアイデアの逆説性に関わる問題の一つだが、Guthrieが指摘するように、これまでこの問題を真正面から論じてきた論者は意外に少ない²⁸。Guthrie自身、動のアイデアがアイデアである限り、むしろ静止していることは当然だとして、問題の生じる要因を、プラトンがアイデアの自己述定性（動のアイデアの動たること）に引きずられた誤りに求めている²⁹。Cornfordなどは、そもそもアイデアの自己述定を否定しているために³⁰、そもそもこの問題自体、生じる余地がない。

動のアイデアが静止を分有しうる可能性を認め、この問題に対する解決を試みたものとして、DièsやRitter、およびBluckらの解釈がある。

Dièsは、『国家』第四巻の独楽（436de）や『法律』第十巻の回転運動（893c）な

どの例を引きながら、完全な動がその運動変化の周期や方向の法則性や規則性によって同一性を保ち、静止していると言っていると論じる³¹。

回転運動は、たしかに恒常不変性の「比喩」としてはふさわしいが³²、それはあくまで動の一事例としての「動くもの」が動と静止を分有するというにすぎない。ここで問題とされているのは、動の一事例が静止を分有するかではなく、動のアイデアそのものが静止を分有するかである。また、動のアイデアの動は、けっして回転運動に限定されるものではないだろう。

Ritterは、動が測定され、記述されるための条件として、動の恒常性が認められ、それによって動が静止することが許容されうると考える³³。

しかし、測定や記述とは、個々の動の具体的な様態に関わることであり、動のアイデアそのものには当てはまらない。これに対しても、動の個々の具体的事例に静止の分有の可能性を求める議論は無効であるという、Dièsに対すると同じ批判が妥当するだろう³⁴。

Bluckは、プラトンにとってアイデアには普遍概念としての面と、範型としての面がそなわっており、概念としての動のアイデアは静止を分有し、静止しうるが、範型としての動のアイデアは、それが動である限り、静止を分有し、静止することはありえないと論じ、しかしプラトン自身は、アイデアのこの二面性の区別を明確に認識しておらず、ここでの分有の可能性への言及が仄めかしにとどまっていることも彼の戸惑いを示唆しており、それゆえこれまでの記述との矛盾に対していかなる説明も与えられていないのだと理解する³⁵。

だが、動のアイデアはアイデアという資格、あるいは「普遍概念」という資格において、静止しているととらえることは、これまでの『ソピステス』の議論の文脈をそっくり否定するものではないか。ギガントマキアーの議論においてすでに見たように、実在＝静止という図式を疑うところから、動のあること（存在）が認められ、メギスタ・ゲネーの結合関係の検討では、ある（有）＝静止という図式が解体されることによって、動のアイデアが、静止のアイデアと同等に、有を分有することによって、あることが同意されたのであった。アイデアは、アイデアである限りにおいて、あるいは「普遍概念」である限りにおいて、実在として静止しているものであるとの論定は、それゆえ、それまでの考察の手続きをすべて無効にし、一切の議論を無意味にすることになる。

では、動のアイデアが静止を分有し、静止する可能性をわれわれはどこに求めるべきだろうか。

動のアイデアは、動であることにおいて恒常不変性・同一性を保ち、その限りにおいて静止しているにとらえることこそ、これまでの議論の展開に沿うものと考えたい。つまり、動のアイデアが範型として「自己述定」によってまさに恒常不変的に動であるという点において、それはある意味で静止を分有し、静止していると言えるのである³⁶。いわば形相主義者が、実在は恒常不変であり（248a11-12, 252a7-8）、恒常不変なものは静止していなければならない（249b12-c2）ことから、実在は静止している（248e2-4, 252a9-10）と考えたように、動のアイデアは、これまでの議論の手続きによって、ちょうどそれとは逆の道筋をたどるようにして、動であることにおいて恒常不変であるから、静止しており、また実在としての性格をそなえていること（動のアイデアの実在性）を最終的に認められるにいたるのである。

ところで、はたして **Bluck** の言うように、分有の可能性が仄めかしにとどまっていることや、それまでの記述との齟齬が説明もなく放置されていることは、プラトンのこの点での戸惑いを示すものだろうか。むしろ、しかるべき議論の順序を踏んで、テアイテトスの理解を確かめながら、エレアの客人が慎重に歩を進めた結果と見るべきではなかろうか。まずは、実在＝静止の図式を切り崩し、動のあることを認めさせ、さらには、動のアイデアを導入して、動と静止の対立関係を前提し、これをメギスタ・ゲネーの結合関係の検討において再三論拠として援用しつつ、ついには、動のアイデアが、動であるという恒常不変性において、ある意味で静止するという逆説を仄めかすにいたったのである。むろん、動と静止との対立関係という前提は、メギスタ・ゲネーの結合関係を論じるうえでたびたび不可欠な論拠をなしている。しかし、それは所詮、考察の手順として有効な、一時的な便宜にすぎぬとも考えられよう。これに代わる適当な排他的対立関係をもつアイデアの類いは他にいくらかもある。ここでは、上に見てきたような、ギガントマキアーの議論からの発展としての内容的な連関から、動と静止という対概念が最適の事例として取り上げられたのだと理解される。

III 考察のまとめと展望 —— 残されたいくつかの問題

以上の考察が含意するものは何か。

実在＝静止という図式が解体され、動のアイデアをめぐって、その実在性が何に存するかが——すなわち、動であることにおける恒常不変性に存することが——明らかにされた。それゆえもはや、知る・知られるという関係において変動を被る（κινεῖσθαι）ことは、動のアイデアが動でありながら不変でありうるように、それが当のアイデアの本質に関わらない限り、実在（アイデア）の実在性をなんら損なうことにはならない。それによって、形相主義者に対しても、事後的に「存在のデユナミス規定」が受け入れられうるものとなり、魂や動や生成のあること（存在）がこの規定にもとづいて最終的に認定されることになる。プラトンの取った論法は、動のアイデアの逆説性を逆手にとって、これを梃子とし、形相主義者の、ひいては「われわれ」の、実在観を一変させるという荒技であった。

いくつかの問題が残される。すでに予定の紙数は尽きた。いまはごく断片的に展望を述べるにとどめたい。

魂は実在とは語られていないが、少なくとも生成とともに存在することは認められている。

はたして魂は生成と言ってよいだろうか。それとも実在と考える余地があるだろうか。あるいはまた、生成と実在の埒外にあると言うべきものなのだろうか。

『パイドロス』の魂の不死論証におけるἀγέννητον (246a1) は、あるときに生成したのではないこと、つまり不生を意味する。『ティマイオス』28b7 のγένεσιν（そこには宇宙の身体だけではなく、魂も含まれる）をこれと矛盾しない意味に解するとすれば、少なくとも「生成である」という意味に理解されねばならない³⁷。

魂が生成であるとするならば、魂がアイデアを知ることはいかにして可能であろうか。

魂は、動のアイデアが動でありながら恒常不変性をもちうるように、「回転運動」に比すべき知性として³⁸、実在のあり方（恒常不変性）³⁹に近づくことによって、アイデアの認識が可能となるであろう（249b12-c5）⁴⁰。

動の原因として、動のアイデアは魂と競合しないだろうか。

もろもろの動は、動のアイデアの似像であることによって動であり、それらの動を動のアイデアの似像としてもたらすのは魂である⁴¹。

動のアイデアは、魂の自らを動かす動としての自己原因性を侵さないだろうか。

魂は、自らを動かす動であることによって、自らを動かすことにおいて、自らの動を動のアイデアの似像としてもたらす。動のアイデアの似像であることによって、自らを動かす動となるのではない。魂の自らを動かす動は、生成ではあるとしても、動のアイデアの似像としてあるのではなく、動のアイデアとは独立の原理であり、第一次的な存在でなければならない。

では、何が魂をして自らを動かす動たらしめるのか。

それは「全き意味での実在」にそなわる知性と言うほかないであろう。

注

¹ 同趣旨の議論は、A 6. 988a7-10, Z 8. 1033b26-28, A 6. 1071b14-16, A 10. 1075b16-20, *De Gen. et Corr.* II 9. 335b18-20 などに繰り返し見られる。

² Ross 1924, pp. 176-177 n. ad 988a9; Bury, pp. l-ii; Guthrie 1981, pp. 246-248.

³ プラトンからの引用は藤澤訳に準拠する。

⁴ de Vogel 1953; 1969, pp. 194-209.

⁵ Cornford 1935, pp. 244-247; Grube, pp. 295-296, cf. pp. 39-40, 161-162; Ross 1951, pp. 107-111, cf. p. 213; Cherniss, p. 352; Guthrie 1978, pp. 143-146.

⁶ Brochard, pp. 138-139, 140-141, 200-201 n.; Diès 1925, p. 289 et n.; 1927, pp. 556-560; Solmsen, p. 80.

⁷ Cornford, pp. 244-245; 田中, pp. 391-392.

⁸ de Vogel 1953, pp. 179-182; 1969, esp. pp. 196-198. cf. also Hackforth 1936, pp. 6-9.

⁹ *Metaph.* A 7, 9.

¹⁰ de Vogel, 1953, pp. 176-179, esp. p. 182; 1969, pp. 196-197. παντελώς: "perfectly, completely". しばしば引き合いに出される、*Tim.* 31b1 の παντελὲς ζῶον にしても、第一義的な意味に関しては同じである（「完全な生きもの」）。この語句の他の用例としては、*Rep.* V 477a3 に「完全にあるもの」という意味で、生成との対比のもとに実在としてのアイデアについて用いられている。

¹¹ cf. 246bc, 248a.

¹² de Vogel 1953, p. 177, pp. 178-179; Cherniss, pp. 349-352; Guthrie 1978, p. 145. cf. *Tim.* 27d-28a, *Phlb.* 59a-d.

¹³ Brochard, p. 139 et n. 1, p. 201 n.; Diès 1927, p. 559.

¹⁴ 田中, pp. 407-408: 「特別の限定をもった有」「特別の存在」。

¹⁵ ここでの "δεινός" の用法は、『パルメニデス』における「二世界説のパズル」の後半、「神の無知」という背景をもたらし議論が、"δεινότερον" (134c4) と呼ばれた含意と相通じるように思われる。

¹⁶ cf. Taylor, p. 51; Campbell, p. 129 n. ad loc., pp. lxx-lxxi, p. lxxvi; 田中, p. 408: 「円満具足の存在」。

- 17 『ソピステス』におけるそのような神の概念に呼応する記述としては、265cd が挙げられよう。
- 18 cf. Bluck, pp. 95-96.
- 19 実際、生成を、実在と対比しながらも存在に含める用例は、論者らが指摘するように (Bury, pp. 210-211; Grube, p. 303; Hackforth 1945, p. 49 n. 2; Cherniss, pp. 353-354; Guthrie 1978, p. 232, cf. pp. 233 n. 3)、後期のみならず中期対話篇にもしばしば見られる (*Phd.* 79a6-10, cf. 78d1-79a5, *Rep.* V 478e1-3, cf. X 558a1-b5, *Phlb.* 26d8, 27b8-9, cf. 23c4-5, *Tim.* 52d2-4, cf. 48e2-52d1)。——しかし、それならばなぜ、あえてそのことがギガントマキアーの議論においてあらためて論じられねばならなかったのか。この問題はギガントマキアーの論旨をどのようにとらえるかという、われわれの次の論点にも関わる。
- 20 Guthrie 1978, p. 139.
- 21 より広い文脈で言えば、虚偽の成立を証明するために、エレアの客人は「あらぬもの」がなんらかの意味で「ある」ことを示そうとしている。虚偽の言明で語られるのは（たとえば、「テアイテトスは飛んでいる」）、なんらかの「生成」としての実際の事態とは異なる別の「生成」としての事態であり、それが「あらぬ（異なる）もの」として「ある」限りにおいて、虚偽の言明の成立が可能となる。それゆえ、まずは「生成」もまた「ある」（存在する）ことが示されねばならなかった。
- 22 以下、「あらぬ」の分析 (257b-258c)、および「あらぬものがある」ことの反省的考察 (258c-259d) を経て、虚偽の言明と虚偽の判断の成立の論証が続く。ギガントマキアーの議論は、虚偽の成立の証明に備えるための存在論的考察（生成もまたある）であり、メギスタ・ゲネーの結合関係をめぐる議論は、同じくそのためのアイデア論を介した意味論的考察（あらぬものもまたある）であると考えられる。
- 23 Brochard, pp. 142-144 は、252d6-11 をはじめとして、250a8-10, 254d7-9, 255a7-b2 など、他の箇所の記事にもとづいて、有分の可能性を頭から否定する。
- 24 e. g. Cornford, pp. 286-287 et n. 3.
- 25 藤澤, pp. 181-183 「補注D」.
- 26 cf. Ritter, p. 61.
- 27 『パルメニデス』の次の一節で、そのことがすでに課題として示されていたことが想起される。「しかしもし誰かが、今しがた私が言っていたようなものとはまったく別に、たとえば類似と不類似、多と一、静止と動など、この種のものすべてのアイデアを、まず第一にはそれ自体が独立にあるものとして区別しておいて、次にそれらがそれら自体の間で混じり合ったり、切り離されたりすることのできるものであることを明らかにしてくれるなら、私の感心と驚嘆は非常なものとなるでしょう」(129de, 田中訳に準拠)。
- 28 Guthrie 1978, p. 150.
- 29 cf. also *ibid.*, p. 160.
- 30 Cornford 1939, p. 87, pp. 98-99. sed cf. 250cd.
- 31 Diès 1927, pp. 502-505.
- 32 cf. *Leg.* X 898ab, *Tim.* 34a, 40ab.
- 33 Ritter, pp. 61-62.
- 34 『パルメニデス』の先ほど（上註 27）の箇所の直前の注意（129a-d）にも反する。
- 35 Bluck, pp. 113-115, 152-153. 先の Guthrie の解釈も、基本的にこの解釈の線に沿うものと言える。
- 36 直前の、「動が、同じものでありかつ同じものであらぬ」という矛盾した述定が観点の限定によって成立するという分析に続けて、この問いが述べられていることが、この解釈の可能性を示唆する。観点の限定という見方の成熟を示すものとしては、259cd の叙述を参照。
- 37 cf. *Leg.* X 892a-896c.
- 38 上註 32 を参照。cf. also *Tim.* 47bc.

³⁹ *Phd.* 78d, *Crat.* 439e-440a, *Tim.* 29bc, *Phlb.* 59cd.

⁴⁰ cf. *Phd.* 79d, *Crat.* 440a-c, *Tim.* 90b-d. Cornford は、249b12-c5 をもっぱら認識対象の恒常不変性に関する記述と解しているが (1935 p. 242: "anything", "objects", p. 245. 同様に、Ross 1951, pp. 109-110; Cherniss, pp. 352-352 n. 5; Guthrie 1978, p. 142)、誤りであろう。

⁴¹ 前者はアリストテレスの形相因、後者は始動因に相当する。

文献

Bluck, R. S., *Plato's Sophist*, 1975.

Brochard, V., *Études de Philosophie Ancienne et de Philosophie Moderne*, 1926.

Bury, R. G., *The Philebus of Plato*, 1897.

Campbell, L., *The Sophistes and Politicus of Plato*, 1867.

Cherniss, H. F., "The Relation of the *Timaeus* to Plato's Later Dialogues", *American Journal of Philology* 78 (1957), repr. in R. E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, 1965, 339-378.

Cornford, F. M., *Plato's Theory of Knowledge*, 1935.

———, *Plato and Parmenides*, 1939

Diès, A., *Le Sophiste* (Platon Œuvres Complètes, VIII 3), 1925.

———, *Autour de Platon*, 1927.

Grube, G. M. A., *Plato's Thought*, 1935.

Guthrie, W. K. C., *A History of Greek Philosophy*, vol. V, 1978.

———, *A History of Greek Philosophy*, vol. VI, 1981.

Hackforth, R., "Plato's Theism", *Classical Quarterly* 30 (1936), 4-9.

———, *Plato's Philebus*, 1945.

Ritter, C., *Neue Untersuchungen über Platon*, 1910.

Ross, W. D., *Aristotle's Metaphysics*, vol. I, 1924.

———, *Plato's Theory of Ideas*, 1951.

Solmsen, F., *Plato's Theology*, 1942.

Taylor, A. E., *Plato: The Sophist & the Statesman*, 1961.

de Vogel, C. J., "Platon a-t-il ou n'a-t-il pas introduit le mouvement dans son monde intelligible?" (1953), *Philosophia* I, chap. VIII, 1970, 176-182.

———, "Some Controversial Points of Plato Interpretation Reconsidered" (1969), *Philosophia* I, chap. IX, 1970, 183-209.

田中美知太郎『プラトンⅢ』(岩波書店 1982)。

藤澤令夫『ソピステス』(岩波版プラトン全集 1976)。

【追記】本稿は、2010年3月27日、古代哲学フォーラム（イリソス会）において発表した原稿に一部加筆・修正を加えたものである。

(くぼ・とおる 筑波大学大学院人文社会科学研究科哲学・思想専攻准教授)